飯田女子短期大学紀要 第34集，27-35，2017

オリンピック選手に対するステレオタイプ内容の探索的検討

林　　晋　子

An Explorative Study for the Contents of Stereotypes about Olympic Athletes

Kuniko HAYASHI

要旨：オリンピック選手の心理的調整には個人の心理的特徴だけでなく，社会的文脈も影響を及ぼしている．しかし，これまでの研究ではオリンピック選手へのステレオタイプを検討してこなかった．本研究の目的はオリンピック選手に対するステレオタイプが存在するかどうか，また，ステレオタイプ内容にジェンダーステレオタイプの影響がみられるかを探索的に検討することである．予備調査ではSD法（semantic differential method）を用いてスポーツ選手の印象評定項目を作成した．本調査では，スポーツ選手の印象評定項目を用いて18歳以上の男女163名を対象にオリンピック選手の印象を尋ねた．その結果，オリンピック選手が力強さと爽やかさの次元で優れた存在として評定されていることが確認された．さらに，男女別に比較した結果，ジェンダーによる違いがみられた．したがって，力強く爽やかなオリンピック選手のステレオタイプが存在すると示唆された．また，ステレオタイプ内容モデルに照らし合わせると，オリンピック選手ステレオタイプは賞賛といった感情の対象となることが考えられた．

Key words：オリンピック選手（Olympic athlete），ステレオタイプ（stereotype），ジェンダーステレオタイプ（gender stereotype）

はじめに

1．オリンピック選手とステレオタイプ

オリンピックに出場する選手の多くは，大会において最も良いパフォーマンスをするために，長期に渡って努力をし続ける．このような選手たちの心理的調整には，個人の心理的特徴だけでなく，さまざまな身体的，社会的，状況的文脈が影響しており，それらは相互に作用し，変化をしながら選手に影響を与えていると指摘されている[1,2]．そして，その社会的文脈の一つとしてステレオタイプが挙げられる．ステレオタイプとは，ある集団に関する単純化されたイメージであり，特定の社会的文脈においてその集団を区別した結果として形成される．例えば，現在ステレオタイプとして広く認識されているのが，ジェンダーステレオタイプである．ジェンダーステレオタイプは，作動性と共同性の２次元で捉えられており[3]，伝統的男性は「有能（高作動性）だが冷たい（低共同性）」，伝統的女性は「無能（低作動性）だが温かい（高共同性）」といった両面価値的に認知されていることが報告されている[4]．このようなステレオタイプ的な認知は誤った判断を招くこともあり，先入観や期待を通して，特定の個人に対する認知や判断に影響を与えるとされている[5]．そして，ネガティブなステレオタイプ的判断を受ける側は自分たちがステレオタイプに関連付けて判断され，扱われるかもしれないというステレオタイプ脅威（stereotype threat）を抱き，関連する課題の遂行に影響

2017年3月31日受付；2017年4月24日受理

を及ぼすことが知られている[6]．逆に，ポジティブなステレオタイプ的判断を受ける場合であっても，困難な課題の遂行を阻害することが報告されている[7]．したがって，オリンピック選手に対するステレオタイプが過度にネガティブまたはポジティブな場合，そのことが選手のパフォーマンス発揮を阻害する要因の一つとなっているかもしれない．

オリンピックに出場するようなトップアスリートは「みな個性的で，ステレオタイプで語ることは難しい」と言われており[8]，また，個々が抱える心理的課題は多様であるため，選手に対してステレオタイプ的判断を下すことは適切ではない．しかし実際に，オリンピック報道がヒーローやヒロインのようなステレオタイプ化されたイメージを演出することや[9]，海外では性差に関するステレオタイプ（ジェンダーステレオタイプ）が明確なシンクロナイズドスイミングや新体操，器械体操が写真記事に多く取り上げられている現状が報告されている[10]．ただし，Iidaは我が国においては成績の影響が大きいとも述べている[10]ことから，選手に対してステレオタイプ的評定がなされているかどうか検討する必要があると考えられる．

２．ステレオタイプの測定

ステレオタイプや偏見に関する研究では，それらの心理過程を理解するうえで，自動的過程（implicit）と統制された過程（explicit）を明確に区別して研究をする必要性が指摘されている[11]．潜在的指標で測定される反応と顕在的指標で測定される反応が存在することや，それらが予測するものは異なることが明らかとなっており[12]，ステレオタイプを検討する際には両方の結果が必要と言える．現在のところ，我が国におけるオリンピック選手ステレオタイプの研究は十分にされていない．そのため，まずは顕在的指標を用いて，オリンピック選手に対するステレオタイプの存在を探索的に検討する必要があると考えられる．顕在的指標として広く用いられているものにSD法（semantic differential method）[13,14]がある．SD法とはある対象の印象について，相対する形容詞・形容動詞を提示し，７段階で評定する方法である[15]．オリンピック選手は広義に捉えればスポーツ選手のカテゴリーに属しているため，スポーツ選手の印象を評定するSD尺度を作成し，男性オリンピック選手と女性オリンピック選手の印象を問う教示文によって，それぞれの評定値を比較する方法が妥当ではないかと考えられる．

３．オリンピック報道とステレオタイプ評定

一般的に，オリンピック選手と接触する機会はオリンピック報道によるものが多いと考えられる．そのため，オリンピック報道がステレオタイプ評定に影響を与えると推測することができるかもしれない．しかし，Katz & Bralyは直接的な刺激経験がないところでもステレオタイプは共有されることを指摘しており[16]，また，マクガーティ，イゼルビット&スピアーズはステレオタイプが共通経験の同時発生的もしくは社会の中で共有された知識の存在を通して集団の成員に共有されているのではなく，集団の成員が自分たちの行動を調整するようにふるまうがゆえに共有されているのだと主張している[17]．したがって，オリンピック報道が視聴者に対して影響を与えているというよりむしろ，社会的相互作用によってステレオタイプが維持され，その結果としてオリンピック報道の演出の仕方があると考えられる．本研究においてステレオタイプが評定されているのであれば，ステレオタイプとオリンピック報道に関連がみられないはずである．そのため，オリンピック選手に対するステレオタイプ内容の妥当性を検証する指標として，オリンピック報道との関連について検討する．

これらのことより，本研究ではオリンピッ

ク選手のステレオタイプは存在するかどうか，その内容にジェンダーステレオタイプの影響がみられるかを検討することを目的とする．加えて，ステレオタイプとオリンピック報道の接触量との関連を調査し，ステレオタイプ内容が妥当かどうかを検証する．

予備調査１

１．目　的

予備調査１の目的はSD尺度の作成方法に準じて，スポーツ選手に対する印象を自由連想によって収集することである．

２．方　法

研究協力者として九州，近畿，甲信越地方に住む18歳以上の社会人，大学院生，大学生，専門学校生の男女332名（男性223名，女性109名. そのうち現役スポーツ選手は152名）から回答を得た．有効回答率は100％であった．なお，研究協力者にオリンピック出場経験はない．研究協力者の平均年齢は24.9歳（*SD*＝8.8，18歳-65歳）．調査時期は2012年７月であった．調査は筆者の友人や知人を介して質問紙を郵送，あるいは大学内で一斉に質問紙を配布し，調査協力に同意を得た場合にのみ回答を求めた. 調査で使用した質問紙は，スポーツ選手，男性のスポーツ選手，女性のスポーツ選手のそれぞれに対してどのような印象があるか自由連想で問う内容であった．ただし，自由連想語は形容詞，形容動詞，動詞に限定した．

３．結　果

質問紙を集計した結果, 190語が収集された．頻度の高かったものは順に，強い（121），格好良い（89），美しい（53），走る（44），速い（34），たくましい（34），凄い（34），食べる（19），健康的な（19），動く（16），上手い（14），努力する（12），素晴らしい（12），大きい（12），爽やかな（11），跳ぶ（11），熱い（11），礼儀正しい（10），筋肉質な（10）であった（括弧内の数字はすべて回答した人数を示す）．これらの結果をもとに，印象評定項目に用いる形容詞を10人以上回答した項目を基準として選定した．そして，選定した形容詞とその反対語を対にし，合計19対の形容詞対を構成した．

予備調査２

１．目　的

予備調査１で作成した形容詞対がスポーツ選手の印象評定項目として適切かどうか検討することである．

２．方　法

研究協力者として九州，近畿，甲信越地方に住む18歳以上の社会人，主婦，大学生，短期大学生の男女295名から回答を得た．そのうち，回答に誤りがあるものや欠損箇所のあるものを除いた252名（男性49名, 女性203名．そのうち現役のスポーツ選手は56名）を分析対象とした．有効回答率は85.4％であった．なお，研究協力者にオリンピック出場経験はない．研究協力者の平均年齢は24.4歳（*SD*＝9.0，18歳-62歳）．調査時期は2012年９月から2013年２月であった．調査は筆者の友人や知人を介して質問紙を郵送，あるいは大学内で一斉に質問紙を配布し，調査協力に同意を得た場合にのみ回答を求めた．質問紙は予備調査１で作成した19対の形容詞であり，その形容詞がスポーツ選手の印象にどの程度当てはまるかを「非常にあてはまらない（－３）」から「非常にあてはまる（＋３）」まで７件法で回答を求めた．

３．結　果

得られた結果がスポーツ選手の印象評定項目として適切かどうか判断するために，19対の形容詞について，探索的因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った．固有値が１以上となったのは第２主成分までで，その

減衰はそれぞれ2.81，1.39であった．第１因子は「筋肉質である」「速い」などの項目から，力強く行動する意味を含むと解釈し，「力強さ」と命名した．第２因子は「礼儀正しい」「素晴らしい」などの項目から，コミュニケーションにおける清涼感を意味すると解釈し「爽やかさ」と命名した．その上で，各次元における負荷量の絶対値が.60以上の形容詞対を選定し，スポーツ選手の印象評定項目とした（表１）．

本　調　査

１．目　的

本調査では，予備調査２で作成した項目を用いて，オリンピック選手に対してステレオタイプ評定がなされているか，またジェンダーステレオタイプの影響がみられるか検討することを目的とした．

２．方　法

研究協力者として九州，近畿地方に住む18歳以上の社会人，主婦，大学院生，大学生の男女199名から回答を得た．そのうち，回答に誤りがあるものや欠損箇所のあるものを除いた163名（男性49名，女性114名．そのうち現役のスポーツ選手は56名）を分析対象とした．有効回答率は81.9％であった．研究協力者にオリンピック出場経験はない．平均年齢は26.8歳（*SD*＝10.0，18歳-62歳）．調査時期は2013年２月であった．調査は筆者の友人や知人を介して質問紙を郵送，あるいは大学内で一斉に質問紙を配布し，調査協力に同意を得た場合にのみ回答を求めた．なお，質問の順序による影響を緩和するため，順序を並び替えた２種類の質問紙を作成した．質問紙の構成は以下の通りである．

(1) フェイスシート

年齢，性別，所属，競技歴（競技スポーツを実施していた期間），現役のスポーツ選手かどうかについて尋ねた．

(2) スポーツ選手印象評定項目

予備調査２で作成した２因子６項目について，男性オリンピック選手と女性オリンピック選手の印象をどのように評定するかを「非常にあてはまらない（－3）」から「非常にあてはる（＋3）」まで７段階で尋ねた．

(3) ロンドンオリンピック報道の視聴量

ロンドンオリンピック報道（テレビ・ラジオ・インターネット等）を視聴したかどうかについて，「全く見なかった（1）」から「非常に見た（6）」まで６段階で尋ねた．

(4) ロンドンオリンピック報道の視聴時間

オリンピック大会中の視聴時間（１日の視聴時間）について「視聴していない（1）」から「３時間以上（6）」まで６段階で尋ねた．

表１　スポーツ選手印象評定項目の探索的因子分析の結果

両極形容詞			Ⅰ	Ⅱ	共通性
第Ⅰ因子：力強さ　（α ＝.80）					
筋肉質である	—	筋肉質でない	.87	－.10	.70
速い	—	遅い	.77	－.01	.59
努力する	—	怠惰な	.62	.18	.50
第Ⅱ因子：爽やかさ　（α ＝.75）					
礼儀正しい	—	無礼な	－.11	.76	.53
素晴らしい	—	みすぼらしい	.08	.75	.62
爽やかな	—	うっとうしい	.05	.61	.40

注）α：Cronbachのα係数

３．結　　果

１）オリンピック選手ステレオタイプの検討

研究協力者がオリンピック選手に対し，ステレオタイプ評定を行ったかを検討するため，各因子の平均値を求め，中央値（0）とのｔ検定を行った．その結果，男女とも印象評定値と中央値との間に有意差がみられた（表２）．したがって，オリンピック選手のステレオタイプは存在し，力強さと爽やかさの次元で「優れた存在」と評定されていることが示唆される．加えて，オリンピック選手の印象を男女別で比較したところ，男性オリンピック選手は力強さが有意に高く評定され（$p<.001$），女性オリンピック選手は爽やかさが有意に高く評定されていた（$p<.001$）（図１）．

２）オリンピック報道とステレオタイプ評定との関連

オリンピック報道の視聴量，視聴時間がオリンピック選手ステレオタイプに影響を及ぼすかどうかを探るため，オリンピック選手ステレオタイプを従属変数に，オリンピック報道の視聴量，視聴時間を独立変数とする重回帰分析を行った（表３）．その結果，重回帰モデルは統計的に有意でなかった．加えて，オリンピック報道の視聴量に関しては研究協力者163名のうち81％もの人が「どちらかと言えば見た」「かなり見た」「非常に見た」と評価しており（表４），１日に１時間以上視聴していた人は全体の40％にも及んだ（表５）．

表２　オリンピック選手の印象評定値と中央値(0)とのt検定の結果（$n=163$）

	男性オリンピック選手			女性オリンピック選手		
	M	*SD*	*t* 値	*M*	*SD*	*t* 値
力強さ	2.34	0.73	40.80 ***	1.86	0.91	25.99 ***
爽やかさ	1.83	1.01	23.12 ***	2.00	0.88	29.06 ***

***$p<.001$

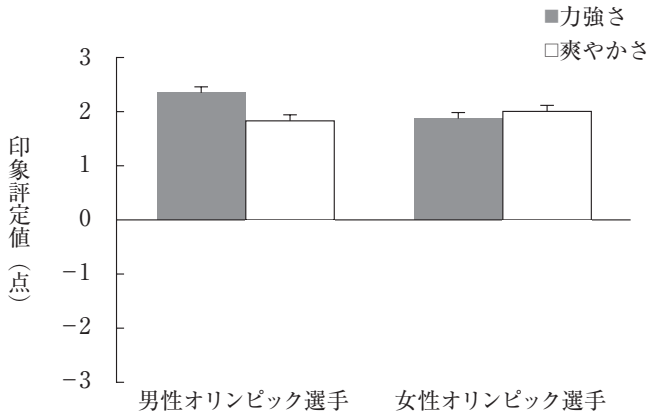

図１　オリンピック選手の印象評定値における男女差（$n=163$）

表３　オリンピック選手の印象評定値とオリンピック報道の重回帰分析の結果

	男性オリンピック選手		女性オリンピック選手	
	力強さ	爽やかさ	力強さ	爽やかさ
視聴量（β）	−.04	.11	−.03	.06
視聴時間（β）	.13	−.01	.07	.09
F 値	.93	.81	.28	1.60
R^2	.01	.01	.00	.02

注）β：標準偏回帰係数，R^2：決定係数

表４　オリンピック報道視聴量

視聴量	n	%
非常に見た	21	12.9
かなり見た	53	32.5
どちらかといえば見た	58	35.6
どちらかといえば見なかった	11	6.7
あまり見なかった	17	10.4
全く見なかった	3	1.8
合計	163	100

表５　オリンピック報道視聴時間

視聴時間	n	%
３時間以上	14	8.6
２～３時間	20	12.3
１～２時間	32	19.6
30分～１時間	54	33.1
30分未満	42	25.8
視聴していない	1	0.6
合計	163	100

４．考　　察

１）オリンピック選手ステレオタイプ

本研究の結果より，オリンピック選手のステレオタイプは存在し，力強さと爽やかさの次元において「優れた存在」として評定されていることが示唆された．これまでに，人や集団を判断する際に使われる基本次元として２次元が重要であろうことが指摘されてきた．例えば，Rosenberg，Nelson & Vivekananthanは性格特性や対人判断の基本構造として，「社会的に良いまたは悪い」「知的に良いまたは悪い」の２次元があると指摘し[18]，Peetersは性格特性を機能的に分類して，「他者に利益を与える特性」と「自己に利益を与える特性」に分類している[19]．また，Fiske，Cuddy & Glickはこれらの構造を「温かさ」と「有能さ」の次元として概念化することを提唱している[20]．これらの先行研究とオリンピック選手のステレオタイプを鑑みると，「爽やかさ」は前者，「力強さ」は後者の特性に言い換えることが可能ではないかと考えられる．なぜなら，爽やかさの次元では「礼儀正しい」や「素晴らしい」といった社会的な態度を含んでおり，力強さでは「努力する」や「速い」といった個人内の能力に関わる項目が含まれるためである．ステレオタイプ内容モデルを提唱したFiske et al. は，ステレオタイプが社会的地位と競争関係の有無により規定され，ステレオタイプの内容が集団に向けられる偏見や感情を規定するとしている[21]．そのモデルでは，社会的地位が高く，内集団のような自己の目標と非競争関係にある集団は，温かさと有能さの両方が高く評定され，賞賛といった感情の対象となることが指摘されている．オリンピック選手が爽やかさと力強さの次元で有意に高く評定されたことは，研究協力者が自国の代表である選手を内集団の成員であると捉えたためと考えられる．したがって，オリンピック選手は賞賛といった感情の対象であることが示唆される．

2）ジェンダーバイアスの存在

オリンピック選手を男女ごとに比較した場合では，男性は力強さが有意に高く，女性は爽やかさが有意に高く評価されていた．この男女による違いは，両面価値的なジェンダーステレオタイプ[21]の影響によるものであると示唆される．ジェンダーステレオタイプは，作動性と共同性の２次元で捉えられており，伝統的男性は「有能（高作動性）だが冷たい（低共同性）」，伝統的女性は「無能（低作動性）だが温かい（高共同性）」といった両面価値的に認知されている．本研究の結果を鑑みると，力強さは作動性，爽やかさは共同性に位置づけることができると考えられる．Glick & Fiskeは両面価値的な評価の理解には，地位の格差，支配と家父長制，親密な関係と敵対的関係といった社会構造の理解が不可欠であると指摘している[4]．このような，社会的構造によって本研究の結果に男女差が生まれたと考えることができるだろう．

3）オリンピック選手ステレオタイプと報道との関係

研究協力者のオリンピック報道との接触は多いものの，報道の視聴量や視聴時間とステレオタイプ評定との間に関連は見られなかった．したがって，本研究で測定したオリンピック選手のステレオタイプ内容は妥当であると考えられる．パリー＆ギルギノフが言うようにメディアはヒーローやヒロインのようなステレオタイプ化されたイメージをわれわれに提供するが[9]，ステレオタイプは社会的相互作用を通じてオリンピック報道を視聴しない人にも流布している．そしてそれは，オリンピック選手に対する賞賛の感情と結びつき，ステレオタイプとして維持されていることが考えられる．

4）ステレオタイプと心理的葛藤

Burgess & Borgidaはあるシステムで特定の立場を占めている集団は，記述的ステレオタイプとほぼ同じ内容で，立場に合致した特性を持っているべきであるという信念（規範的ステレオタイプ）も生じると指摘している[22]．記述的ステレオタイプとは，「○○は××である」という信念であり，規範的ステレオタイプとは，「○○は××であるべき」という信念を指す．オリンピック選手が「力強く爽やかな」あるべき姿を内在化できない場合，選手自身が現実自己との間で葛藤を抱く可能性も示唆される．加えて，観衆のポジティブな期待は困難な課題の遂行を阻害することが報告されている[7]ことから，ポジティブなステレオタイプ的評定が選手のパフォーマンス発揮に影響を及ぼす可能性があると考えられる．また，林・土屋はオリンピックの競技成績によって，社会の反応に違いが生じる事例を報告している[2]．オリンピック選手に対する社会の期待が高いからこそ，良い成績を残せなかった選手には期待に反した結果として無関心といった現状が存在するのかもしれない．集団間バイアスや偏見は，多様性を求める教育によって修正しうることが主張されている[23]．しかし，一方では，望ましくない思考を意識的に抑制しようとすると反動でかえってそれが強まるといったことも見出されている[24]．したがって，われわれはオリンピック選手を「力強く爽やかな」存在としてのみとらえるのではなく，個人の多様性を認めるようにする必要があると考えられる．そして，選手が活躍した場合にのみ賞賛を与えるのではなく，選手が長年に渡って努力し続けてきた過程に理解を示し，その在り方に賞賛をするべきではないだろうか．

本研究の限界と今後の課題

本研究では，オリンピック選手をスポーツ選手カテゴリーに属すると捉えて研究を実施したが，オリンピック選手特有のステレオタイプ内容が存在する可能性は否定できない．また，男性オリンピック選手と女性オリンピック選手という２つに刺激語を分けたが，

これは「男性または女性」という刺激と「オリンピック選手」という刺激が混在したため，「オリンピック選手」に対して人々がどのような内容のステレオタイプ評定を行っているかは判断できない．しかし，本研究の結果より，オリンピック選手ステレオタイプの存在が認められ，そのことが選手に対する賞賛という感情に繋がっていることやステレオタイプ内容にジェンダーバイアスが認められることが示唆された．

重ねて，本研究では顕在的指標を用いてステレオタイプを検討した．これは統制された過程を評価しているため，自動化された過程までは検討することができていない．今後は選手に対するステレオタイプ評定がどの程度自動化されうるのか，顕在的指標との違いはみられるのかを検討する必要があるだろう．スポーツにおいては，柔道やレスリングなど力強さが求められる競技とフィギュアスケートや新体操など美しさが求められる競技が存在する．そのため，競技特性と性別によってステレオタイプの内容が変化するのかどうかも検討する必要があると考えられる．

さらに，本研究においては個人の経験を捨象し，オリンピック報道との関連のみを検討している．今後の研究においてはさらに対象者を増やしたうえで，研究協力者のスポーツ経験や視聴したオリンピック種目などの差を考慮し，ステレオタイプの存在を検討していくことも検討する必要があるだろう．

謝　辞

研究にご協力をいただいた皆様，研究に際してご指導またはご指摘をいただきました皆様に心から感謝申し上げます．

注および文献

1）Gould, D. & Maynard, I.：Psychological preparation for the Olympic Games. *Journal of Sports Science*, **27**(13), 1393-1408, 2009.

2）林晋子，土屋裕睦：オリンピアンが語る体験と望まれる心理的サポートの検討－出来事に伴う心理的変化と社会が与える影響に着目して－．スポーツ心理学研究，**39**(1) 1-14，2012.

3）Bakan(1966)[25] によれば共同性とは大きな有機体に属する個人としての存在様相に関するもので，他者と一緒にいるという感覚，接触，開放，結合，契約的でない協力を意味する．他方，作動性は個人としての有機体の存在様相に関するもので，自己擁護，自己主張，自己拡張，達成への促進，分離，孤独などを意味する．

4）Glick. P. & Fiske, S. T.：Ambivalent sexism. *Advances in Experimental Social Psychology*，**33**, 115-188, 2001.

5）Hamilton, D. L., & Gifford, R. K.：Illusory correlation in interpersonal perception：A cognitive basis of stereotypic judgments. *Journal of Experimental Social Psychology*, **12**(4), 392-407, 1976.

6）Steele, C. M., & Aronson, J.：Stereotype threat and the intellectual test performance of African Americans. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**(5), 797-811, 1995.

7）Butler, J. L. & Baumeister, R. F：The trouble with friendly faces: skilled performance with a supportive audience. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**(5), 1213-1230, 1998.

8）山口香：柔道－プレッシャーやリスク，孤独を恐れない心をもった者がチャンピオンとなる－．体育の科学，**62**(8), 598-600，2012.

9）パリー，J. & ギルギノフ，V.（桝本直史訳）：オリンピックのすべて－古代の

理想から現代の諸問題まで－，大修館書店，東京，2008，pp. 103-129.

10）Iida, T：Japan. In T. Bruce, J. Hovden, & P. Markula（Eds.）*Sportswomen at the Olympics：A global content analysis of newspaper coverage*. Sense Publishers, Rotterdam, 2010, pp. 225-236.

11）Devine, P. G.，& Monteith, M. J.：Automaticity and control in stereotyping. In S. Chaiken & Y. Trope（Eds.），*Dual process theories in social psychology*. New York：Guilford. 1999, pp. 339-360.

12）Dovidio, J. F.，Kawakami, K.，& Gaertner, S. L.：Implicit and explicit prejudice and interracial interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**（1），62-68, 2002.

13）Osgood, C. E.，Suci, G. J. & Tannenbaum, P. H.：*The measurement of meaning*. Univ. of Illinois Press, United States of America, 1957.

14）岩下豊彦：SD法によるイメージの測定，川島書店，東京，1996.

15）ここでの印象とは，ある対象を構成する情緒的意味を指す.

16）Katz, D. & Braly, K.：Racial stereotypes of one hundred college students. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **28**（3），280-290, 1933.

17）マクガーティ，C.，イゼルビット，Y，V. & スピアーズ，R.（国広陽子監修，有馬明恵，山下玲子監訳）：ステレオタイプとは何か－「固定観念」から「世界を理解する“説明力”へ」－，明石書店，東京．2007，p. 15.

18）Rosenberg, S.，Nelson, C.，& Vivekananthan, P. S.：A Multidimensional approach to the structure of personality impression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **9**（4），283-294, 1968.

19）Peeters, G.：From good and bad to can and must：Subjective necessity of acts associated with positively and negatively valued stimuli. *European Journal of Social Psychology*, **32**（1），125-136, 2002.

20）Fiske, S. T.，Cuddy, A. J.，& Glick, P.：Universal dimensions of social cognition：Warmth and competence. *Trends in cognitive science*, **11**（2），77-83, 2006.

21）Fiske, S. T.，Cuddy, A. J.，Glick, P.，& Xu, J.：A model of（often mixed）stereotype content：Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**（6），878-902, 2002.

22）Burgess, D. & Borgida, E.：Who women are, who women should be：Descriptive and prescriptive gender stereotyping in sex discrimination. *Psychology, Public, Policy and Low*, **5**, 665-692, 1999.

23）Rodman, L. A.，Ashmore, D. & Gary, M, L.：“Unleaming” automatic baises：The malleability of implicit prejudice and stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**（5），856-868, 2001.

24）Wenzlaff, R. M.，& Wengner, D. M.：Thought suppression. *Annual review of psychology*, Annual Reviews, **51**, 59-91, 2000.

25）Bakan, D.：*The duality of human existence*, Land McNally, Chicago, 1966.